

## 統計的考察と地域的統計化の必要

茨城大学教授 桜井 明 俊

合理化ということは労働組合あたりからは、とかく嫌われる言葉である。事の本質が取り違えられているからであろうが、本来は論理に合ったものにしていくということであり、異論や反対のあるはずはない。すべていろいろな問題に対処する場合、その処理をどう合理的に行なうかというとき、統計的な考察はきわめて有効な処理を可能にするものである。いわば、これは昔の人々の行なってきた経験的考察ということにもなる。

戦後の学校教育で社会科という新しい教科ができた。その授業の中で「お母さんの仕事」という単元で、一日中の母親の動きを調べさせたものがあつた。これで見ると母親が台所にいる時間がかつても多いことが判り、これから台所の改善という考え方が合理的とされた。また現在の住居の間取りが家族の最も多く利用する居間、台所を日当たりの良い条件の位置に造るようになった。これらは居室利用の統計的な考察と家族生活中心の考え方が現代社会の合理的な住居として認められたからであろう。私どもが、かつて茨城大学の学生会館を建設するとき、その目的や予算の枠の中で学生集会室をいくつ、どのような規模でつくるかという問題を解決したのは、それまでの教室利用の課外活動を届出書類によって分析した結果を利用したものであつた。この届出統計は予算折衝でも有効な発言力をもつたものである。

このように統計的な考察は統計利用にもつながってくるのであるが、これを地域にあてはめていくと、これは地域開発発計画にもつながっていく。もともと地球の生活というのは、その地域に永い歴史を積み重ねて自然環境と結合し、生産と社会をつくりあげてきた。これは永い経験の昇華ともいふべき生活態様である。この地球の生活態様を、より一層効果的に高めようというのが、地域開発の合理性であろう。この地域の経験することを統計におきかえて、地域の諸現象をは握することが、地域開発を合理的に考える筋道であるはずである。

昭和30年ごろ、波崎町を調査したとき、偶然、波崎発17時半ごろの海岸回り鹿島行の最終バスに乗り合せた。銚子方面からの勤め帰りの通勤バスの性格をもつとみて、停留所ごとの降車人数を記録してみた。結果は降車人数はほぼ部落の大小と比例していた。このことから海岸寄り集落全体が銚子市に対しても、部落内部に対してもほぼ同質的な状態（性格）にあると判断された。これは前に調査した常陸川沿いの集落が銚子からの距離によって性格に差のある状態とは異なっていたのである。ここから海岸地域と河岸地域の問題を考え出すことができた。

統計を仮に場所の関係から分けると非地域的統計と地域統計とに、時間の関係から分けると経時的統計と同時的統計とに大別される。波崎の最終バスでとつた停留所ごとの降車人数の統計は地域的、同時的統計だといえよう。非地域的な統計は全般の掌握にはよいとしても、個々の地域を考える場合には利用が不可能である。地域開発ということが更に進んで個々の市町村地域にまで及んでくる現在では、地域的統計に重点をおく必要がある。これは単に行政施策上ばかりでなく、地域の研究上でも、地域の教育上でも重要性が大きい。それは地域を比較することができるし、細かな地域の実態を知ることができるからである。比較の中から自分の位置を自覚するということも重要な統計的考察といえよう。そこで少なくとも県統計はすべて市町村別統計にするという地域統計化が望まれるのである。